

幼稚園教諭をめざす学生の自然観 (1)

越中 康治・小津草太郎*

Prospective Kindergarten Teachers' Views of Nature (1)

ETCHU Koji, OZU Sotaro*

(Received August 5, 2008)

キーワード：自然観、幼児教育、大学生

はじめに

倉橋惣三(1918)が「教育者が子供と一致し得るためには自然と一致し得る人でなければならぬ」(p. 22)と述べたように、幼児教育・保育の分野では、伝統的に「自然」が重視されてきた。「自然を愛し、自然に興味を持つということは、子供の教育者として、もっとも大切な資格の一つである」(p. 23)とされるが、これから保育者をめざす学生自身は「自然」をどのようにとらえているのであろうか。本稿では、幼稚園教諭免許状の取得をめざす学生の自然観について検討を行う。

1. 問題と目的

そもそも「自然」とは何であろうか。木田(2004)によれば、「自然」という語には2つの用法・意味がある。第1に、山川草木や動物などの「人間社会や人間的諸事象と区別される特定の存在領域」(p. 10)という意味がある。第2に、「人間や人間的諸事象をもふくめたすべてのものの本来のあり方、おのずからあるがままのあり方」(p. 11)という意味がある。木田(2004)によれば、前者は、明治時代に「自然」という語がnatureの訳語として使われるようになってからの副次的な意味である。日本語の「自然」のみならず、英語のnatureやラテン語のnatura、さらにはその大本となるギリシア語のphysisについても、後者の用法の方が古く、意味においても根源的であると考えられている。

それでは、幼児教育・保育の分野においては、どのような意味を持つのであろうか。1980年出版の『幼児保育学辞典』をひもとくと、「自然」の項には4つの意味が記されている。第1には「おのずからそうなること」、第2には「(nature)人為のくわわらないすがた。自然界」と一般的な意味が記されている。そして、第3に「幼稚園における教育課程の一つ」、第4に「保育所における望ましいおもな活動の一つ」とある(村山, 1980, p. 284)。

*鹿児島女子短期大学

幼児教育・保育において「自然」は古くからカリキュラムの中に位置づけられてきた。村山（1980）と『幼稚園教育百年史』（文部省，1979）を参考に、幼児教育における歴史の変遷を概観すると、そのはじまりは大正 15（1926）年に制定された「幼稚園令施行規則」にまでさかのぼることができる。明治 32（1899）年の「幼稚園保育及設備規定」における保育の項目が「遊嬉、唱歌、談話及手技」の 4 項目であったのに対し、「幼稚園令施行規則」では「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」と修正が加えられた。明治末期から大正期にかけて、実際に多くの幼稚園で飼育や栽培が行われるようになったことを背景として、「観察」が保育項目の一つとして位置づけられたのである（文部省，1979）。

この「観察」という項目は、戦後は「自然観察」とされた（村山，1980）。昭和 23（1948）年に刊行された「保育要領—幼児教育の手びき—」の中で、「幼児の保育内容—楽しい幼児の経験—」全 12 項目の一つに「自然観察」が位置づけられたのである。「自然観察」の項では、科学的態度を養う自然の経験として、参考までにと各月の計画例（小川あそびや草花つみなど）も掲げられた（文部省，1979）。そして、昭和 31（1956）年に刊行された「幼稚園教育要領」において、内容の幅がより広い「自然」が、いわゆる 6 領域の一つに位置づけられることとなった（村山，1980）。昭和 39 年（1964）の改訂では、領域「自然」に「身近な動植物を愛護し、自然に親しむ」「身近な自然の事象などに興味や関心をもち、自分で見たり考えたり扱ったりしようとする」などの事項が記された。

その後、平成元（1989）年の改訂において、保育内容は 5 領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）に再編成された。平成 10（1998）年、そして本年の改訂においても、この編成は変わっていない。5 領域の中で最も「自然」との関連が深いのは「環境」であるといえよう。新しい幼稚園教育要領においても、「環境」の「ねらい」の筆頭には、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもち」と記されている。「内容」においても、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」など、自然と関連の深い項目が示されている。さらには、「内容の取扱い」の中で、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」と特記されている。

また、「環境」以外の他の領域においても、内容の取扱いに、「自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促される」（健康）、「道徳性の芽生え」について「自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つ」（人間関係）、「豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われる」（表現）などの留意事項が記されている。

以上のことから、「自然」が幼児教育のカリキュラムといかに深くかかわってきたかがわかる。日本の幼児教育・保育は、子どもと自然とのかかわりに「豊かな人間性の育成と科学性の芽生え」（井上，2003，p. 46）など多くの要素を見出してきた。幼児期における自然体験の重要性については、熟達した保育者であればこれを強く認識している。越中・杉村（2008）は、熟達した保育者を対象として、自然に関する認識について面接調査を実施した結果から、熟達した保育者が「自身の幼児期の実体験」と「自然のもつ教育的な力」の認識に基づいて幼児期における自然体験を重視していることを明らかにしている。

他方、越中・杉村（2008）では、熟達した保育者の自然観（自然についての見方・考え方）には、「人間を含めて自然をとらえる視点」と「自然を対象としてとらえる視点」の2つのタイプがある可能性も示唆されている。すなわち、自らも自然の一部であるとして「自然の中にいるという感覚」を中心に自らの自然観を語る保育者と、「対象・素材としての自然」について、その可変性や意外性などの魅力を語る保育者とが存在したのである。こうした自然観の相違が実際の保育にどのような影響を及ぼすのか、そして自然観に相違が生じる背景にどのような要因があるのかを探ることが今後の課題として残されている。

後者について検討する上では、保育者をめざす学生の自然観を検討することが重要であると考えられる。梶田・杉村・後藤・吉田・桐山（1990）は、専門職としての保育観について、学生時代に形成され、熟達するに至るまで様々な過程を経て変化すると指摘している。この指摘を踏まえると、自然観もまた学生時代にその原型が形成されているものと予想される。自然観の相違は保育者をめざす学生においても見出されるのであろうか。また、自然観に関して、学生と熟達した保育者との間にはどのような共通性・相違があるのであろうか。本稿では、山口大学教育学部で保育内容環境を受講する学生（ほとんどが幼稚園教諭の免許状取得をめざしている）の協力のもとに、これから保育者をめざす学生が「自然」をどのようにとらえているのかを検討した結果を報告する。

2. 方法

2-1 協力者

協力者は、第1著者が担当する保育内容環境を受講した山口大学教育学部の学生25名（うち3名は男性）であった。その内訳は、幼児教育コース2年生12名（男性1名）、障害児教育コース2年生7名（男性2名）、教育心理学コース2年生1名、生活健康科学コース2年生2名、音楽教育コース4年生2名、国際理解教育コース4年生1名であった。協力者は、幼稚園教諭の免許状取得をめざす（あるいは考えている）学生たちであった。

2-2 手続き

保育内容環境の第2回から第5回の授業の中で、自然について受講生に考えてもらった。第1回のオリエンテーションを経て、第2回の授業（2008年4月17日）では、自然観等に関する自由記述を個別に求めた。具体的には、A4版の用紙1枚を配布し、①「自然観」（「自然とはどのようなものですか？」）、②「保育観」（「保育（幼児教育）とはどのようなものですか？」）、③「自然体験の重要性」（「幼児期の自然体験は重要ですか？重要と思われるのであれば、それは何故ですか？」）の3つの質問について回答を求めた。これらの質問項目は、熟達した保育者を対象として自然観・保育観に関する面接調査を実施した越中・杉村（2008）と同一のものであった。

第3回の授業（4月24日）では、3つの質問それぞれについて、受講生全員の自由記述全文をワープロで打ちだしたプリント（①と②はA3版1枚、③はA3版1枚とA4版1枚）を配布し、まずは各自で他の学生の考えや思いに目を通すよう求めた。その後、各自の関心に応じて5名程度の小グループを作り、3つの質問（テーマ）のうち関心があるもの1つについて、プリントをもとに話し合いを行い、学生の考えや思いを集約して、模造紙1枚にまとめるよう求めた。そして、第4回の授業（5月1日）において、各グループの発

表を行った。さらに、第5回(5月8日)では、越中・杉村(2008)で抜粋した、熟達した保育者の自然観・保育観の面接調査結果を配布し、学生と熟達した保育者との違いについて考えるよう求めた。

本稿では、3つの質問(テーマ)のうち、①「自然観」と③「自然体験の重要性」を取り上げ、各グループのまとめを示すとともに、学生の自由記述を分析する(②「保育観」については本稿では割愛する)。なお、研究の実施・公表にあたっては、事前に、自由記述、模造紙へのまとめ、授業の感想、作業の様子の写真などを、個人が特定されないよう配慮した上で使用したいと考えていることを協力者に伝え、了承を得た。

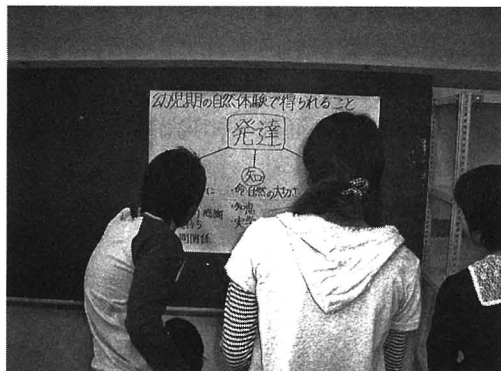


図1 学生の作業の様子(1)

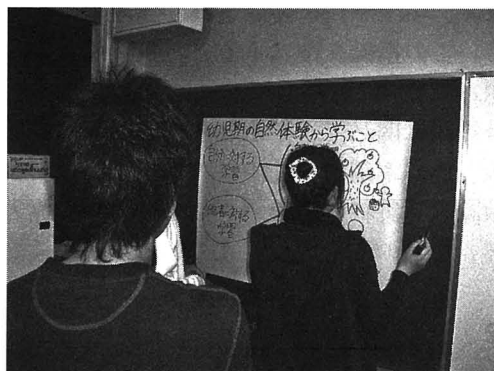


図2 学生の作業の様子(2)

3. 結果

3-1 学生によるまとめ

まず、「自然観」と「自然体験の重要性」について、学生によるまとめを示す。

3-1-1 学生による「自然観」のまとめ

「自然観」(「自然とはどのようなものですか?」)については、1つのグループ(女性5名)がまとめ、発表してくれた。図3は模造紙にまとめられた内容を出来る限り忠実に再現したものである。

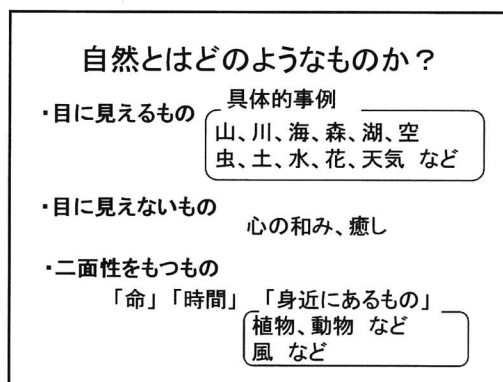


図3 自然とはどのようなものか?

学生の発表によると、学生がとらえる自然には、「目に見えるもの」「目に見えないもの」「二面性をもつもの」の3つがある。「目に見えるもの」は「山や川、海や森などの具体的事例を挙げたもの」であり、「目に見えないもの」は「和みや癒しなどの心情に言及しているもの」である。そして、「二面性をもつもの」は「命」や「時間」などである。発表の際、学生が口頭で説明したところによると、「例えば、命は直接見えないが動物を見ればわかる」といったように、「身近にあるもの」を通してとらえることのできる抽象的な事柄を「二面性をもつもの」と表現したとのことであった。

なお、このテーマに取り組んだ学生たちは、発表の際、自然についてまとめることは非常に困難であったと語った。授業後の感想にも「私は『自然』について話しましたが、こんなにもとらえどころのないものだとは思っていませんでした」「なかなかはっきり分類できなくて難しいなと感じました」などの記述が多かった。

3-1-2 学生による「自然体験の重要性」のまとめ

「自然体験の重要性」（「幼児期の自然体験は重要ですか？ 重要と思われるのであれば、それは何故ですか？」）については、2つのグループがまとめ、発表してくれた。図4と図5は模造紙にまとめられた内容を出来る限り忠実に再現したものである（イラストは、描いた学生の許可を得てスキャナにて取り込み掲載した）。図4は男性1名と女性3名によるグループ、図5は男性2名と女性2名によるグループのものである。

自由記述の際、「幼児期の自然体験は重要ですか？」の問いに「重要でない」と答えた学生は皆無であったため、いずれのグループも「何故、重要なのか？」をまとめた。「幼児期の自然体験で得られること」の表題でまとめたグループは、「幼児期の自然体験は全て『発達』に関係している」「すべては発達につながる」（授業の感想より）として、「心」「知」「体」の3側面からまとめた。他方、「幼児期の自然体験から学ぶこと」の表題でまとめたグループは、自然体験では「自分自身の中での学びと自分と他者との学び」（授業の感想より）があるのではないかとして、「自分に対する学習」と「他者に対する学習」の2側面からまとめた。

発表後、それぞれのグループの学生からは、「同じ題目でも、視点が違ったり、分類の仕方やまとめ方が違ったりと、とても面白い」「それぞれの班でまとめ方が全然違って、なるほどなあと思うことが多かった」などの感想がよせられた。

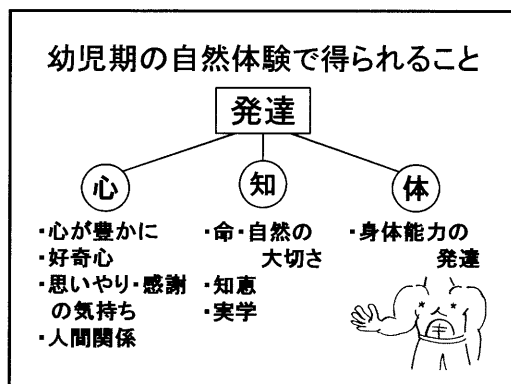


図4 幼児期の自然体験で得られること

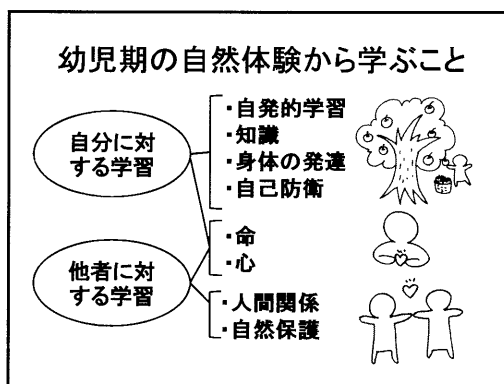


図5 幼児期の自然体験から学ぶこと

3-2 学生の自由記述の分析

次に、学生によるまとめ(3-1)を参考にして、「自然観」と「自然体験の重要性」について、学生の自由記述を分析する。

3-2-1 学生の自然観

学生によるまとめを参考にして、「自然観」(「自然とはどのようなものですか?」)についての自由記述を分類したところ、表1のようなカテゴリに分けられた。

表1 「自然とはどのようなものですか?」という問いに対する学生の回答

カテゴリ	記述例	幼児 (n=12)	その他 (n=13)	全体 (N=25)
山川草木・ 動物など	自然と聞いてパツと思いつくのは花や草や虫など… 山や海、川などが真っ先に思い浮かびます/四季/天気 草や花、木などの植物、山や川、森や林など/風、太陽、雨	9	8	17
天然	人工ではないもので、最初から存在しているもの 地球上に本来あるもの/人間の手を加えられていないもの あまり人の手が入っていないもの	7	6	13
癒し	私たちの心を癒してくれるもの/見ている心が和むもの 緑がいっぱいで景色がきれいで、いやされるもの 人間とは違う動植物の存在で人は癒される	4	6	10
好き (一部嫌い)	自然は好きです/草っぱらに寝ころがるのが好き 特に花をみるのが好きです (でも昆虫は苦手です/ですがカエルだけは好きになれません)	4 (2)	6 (3)	10 (5)
統制不能	人間の力ではコントロールできない、不思議なもの 自然の力には人間は敵わないと思う	4	3	7
身近	私たちの身近に常にあるもの/身の回りにあるものほとんど 私たちの周りにはたくさんの自然があります/当たり前にある	2	4	6
必要性	人間にとってなくてはならないもの/欠かせないものです 生きていくために必要なものです/自然を生活に利用している	2	3	5
人間を含む	私たち人間もその自然の一部/人間と植物などが共存している 人と「自然」がうまく共生している姿が「自然」	2	2	4
発達・学習	いろんなことを学ぶことができる/子どもにとって絶好の遊び場 日常生活の中では経験することができないことができる場所	2	2	4
生と死	生き物が生まれたり死んでいくこと 命の輝きや〈中略〉反対に、死という厳しい一面も持っている	1	3	4
危険	ときには命にも関わるような危険が多く潜んでいる それなりに危険なこともあると思います	2	0	2
その他	今、人間によって破壊されつつあるもの お金がなくても遊べるもの	3	2	5

注) 数値は各カテゴリに該当する記述を行った学生の人数。

学生の自由記述には、各カテゴリに該当する内容が平均 3.5 個（標準偏差：1.1、範囲：1-6）含まれていた。例えば、「自然という言葉を知ると、山や海、川などが真っ先に思い浮かびます。自然の中で生きている虫や植物も自然だと思います⁽¹⁾。私は自然が好きです。虫は基本的に苦手ですが、特に花をみるのが好きです⁽²⁾。自然は当たり前にあるものであって⁽³⁾、欠かせないものです⁽⁴⁾。（幼児教育コース学生）」のように、複数の内容（ここでは、山川草木・動物など⁽¹⁾、好き（一部嫌い）⁽²⁾、身近⁽³⁾、必要性⁽⁴⁾）が含まれることがほとんどであった。なお、幼児教育コースの学生（12名）は平均 3.5 個（標準偏差：1.2、範囲：1-6）、その他のコースの学生（13名）も平均 3.5 個（標準偏差：1.1、範囲：2-5）、各カテゴリに該当する内容を記述していた。

「山川草木・動物など」については、約 7 割（25 名中 17 名）の学生がこれに言及していた。学生のまとめでは「目に見えるもの」とされていた内容であり、表 1 に挙げた以外にも「自然というと、四季、森、植物、虫などが思い浮かびます」「木、草、花、土、水（池や川、海など）等があるところというイメージです」「澄んだ空気、森、緑、水。鳥の鳴き声、虫、動物」などの記述があった。

「天然」については約 5 割（25 名中 13 名）の学生がこれに言及していた。学生のまとめではこの内容について特に取り上げられなかったが、「山川草木・動物など」に言及しつつ、「山、海、川などの人の手が加わっていないようなところだと思います」「植物や動物や人間の手が加えられていないもの」などの記述をした学生が多かった。

「癒し」については 4 割（25 名中 10 名）の学生がこれに言及していた。学生のまとめにおいても、「和みや癒しなどの心情に言及しているもの」として「目に見えないもの」が大きく取り上げられていた。「癒し」という言葉を用いた学生がほとんどであったが、「悩みを抱えていても、自然に触れると『私は自然の中ではちっぽけな存在なのだ』と励まされることがある」と記述した学生もいた。

「好き」についても 4 割（25 名中 10 名）の学生がこれに言及していた。ただし、この 10 名のうち半数（5 名）は、基本的には自然が「好き」であるとしつつも、「一部嫌い」な（あるいは苦手な）ものがあると記述していた。表 1 にも記載したように、虫などの一部の生き物が苦手であるとする学生が多かった。

以上の 4 カテゴリが、比較的言及された割合の高いものであった。他に、言及された割合が 3 割以下のカテゴリとして、「統制不能」「身近」「必要性」「人間を含む」「発達・学習」「生と死」があった。なお、複数名からの言及がなされなかった内容については「その他」とした。

3-2-2 自然体験の重要性に関する学生の理由づけ

学生によるまとめを参考にして、「自然体験の重要性」に関する学生の理由づけを分類したところ、表 2 のようなカテゴリに分けられた。学生の自由記述には、各カテゴリに該当する内容が平均 3.2 個（標準偏差：1.2、範囲：1-6）含まれていた。例を挙げると、「重要だと思う。例えば、山道を散歩すると木や小川、花や虫、鳥など様々な物との出会いや新たな発見をすることができる⁽¹⁾。そうすれば花がどういうものか、虫がどういうものか、というような知識を増やすことができる⁽²⁾のはもちろんのこと、実際に目で見て手に触れ感じることで感性を豊かにすることができる⁽³⁾からである。ほかにも、自然の中で遊ぶことにより、身体の発達も促すことができる⁽⁴⁾と思う。（幼児教育コース学生）」のように、

自然観と同様、複数の内容（ここでは、出会いや発見⁽¹⁾、実体験・学び⁽²⁾、豊かな心・感性⁽³⁾、身体の発達⁽⁴⁾）が含まれることがほとんどであった。なお、幼児教育コースの学生（12名）は平均3.2個（標準偏差：1.3、範囲：1-5）、その他のコースの学生（13名）も平均3.2個（標準偏差：1.2、範囲：2-6）、各カテゴリに該当する内容を記述していた。

「実体験・学び」については、5割強（25名中14名）の学生がこれに言及していた。学生のまとめにおいても「幼児期の自然体験から学ぶこと」の表題が掲げられたり、「知恵」や「実学」などのキーワードが挙げられていたりしていることから、実体験を通しての学びは特に重視されている要素であることがうかがえる。表2に挙げた以外にも「自然の中でしか体験できないことが山ほどあるからです。もちろん、字を書く、本を読むなども大切な勉強ですが、いくら口で教えても自然の中で遊んで学ぶことは分からないと思います。〈中略〉虫の成長とか、そんなことは教えるよりも実際に見て学ぶほうが分かりやすいし、おもしろいと思います」「よもぎを怪我したところにつけるといいとか、ワラで縄ができるとか、様々なことを学ぶことができる」などの理由づけが見られた。

表2 幼児期の自然体験の重要性に関する学生の理由づけ

カテゴリ	記述例	幼児 (n=12)	その他 (n=13)	全体 (N=25)
実体験・ 学び	本やテレビ〈中略〉の体験と実際に体験する自然は全然違う			
	花の匂いや草の感触は、体験しなければ分からない	6	8	14
	自然体験を通して、多くのことを学ぶ			
命や自然の 大切さ	命の大切さを知る／草木や虫にも命があるということを知る			
	「命の尊さ」というとても大事なことを学ぶ	6	6	12
	自然の大切さ、ありがたさといったようなものを感じる			
豊かな心・ 感性	実際に目で見て手に触れ感じることで感性を豊かにする			
	自然と関わることによって、人は心が豊かになる	8	3	11
	感性が育つと思う／感受性が豊かになる			
自分の経験	私も小さい頃は自然の中で遊んでいてそのことをすごく覚えている			
	子どものころ、学校の前の川で遊んだり、山に登ったり…	5	5	10
	私自身も笹舟を作ったり、ピーピー豆で遊んだり…			
出会いや 発見	自分の知らない植物や虫などに会えて…			
	自然には、すごくいろいろな発見や驚きがあつて…	4	5	9
身体の発達	木登りなどの中で、身体機能を身につけていく			
	自然で遊ぶことで体力もつく／身体の発達も促すことができる	4	2	6
好奇心	好奇心を育てる機会／子どもの知的好奇心を刺激し…	2	2	4
人間関係	人間関係を育むこともできる	2	1	3
思考力	考える力がつく／創造力も育つと思います	1	2	3
のびのび育つ	のびのびとした子どもに育つ／のびのびと成長できる	0	3	3
季節感	日本ならではの四季というものを知る	0	3	3
その他	家の中でTVゲームなどばかりする子ども〈中略〉になってしまう	0	2	2

注) 数値は各カテゴリに該当する記述を行った学生の人数。

「命や自然の大切さ」についても、半数近く（25名中12名）の学生がこれに言及していた。学生のまとめにおいても「命・自然の大切さ」や「自然保護」などのキーワードが挙げられていた。「人間は魚や肉など他の命を食べて生きていくものなので、他の生き物に対して思いやりや感謝の気持ち（中略）を知るべきだと思う」「外での遊びの中で子どもは虫に興味を持つ。それをつぶして殺してしまったり、飼ってかわいがっていた虫が死んでしまったり、また、卵やさなぎから成虫が生まれる場面を見ることで、命の大切さを自然と学んでいくのだと思う」「今、地球の自然はどんどん破壊されていて、人間は自分達のしてきたことの代償を払わなければならない。幼児期に自然体験をしていれば、それを守らなければならないという気持ちになると思う」などの記述がなされた。

「豊かな心・感性」については、幼児教育コース以外の学生では2割程度（13名中3名）であったが、幼児教育コースの学生では6割強（12名中8名）が言及していた。全体としては約4割（25名中11名）の学生が言及したこととなる。幼児教育コースの学生を中心として、「自然体験をすることでいろいろな美しいもの、おもしろいもの等を見て感性が育つと思う」「美しいものを美しいと思える、豊かな心を育むことにつながると思います」「遊びの中で無意識に五感を働かせて磨くことで感受性が豊かになると思います」といった記述がなされた。

「自分の経験」についても4割（25名中10名）の学生がこれに言及していた。その多くは、自由記述の冒頭から「私は幼児期の自然体験は重要だと思います。それは、私自身の体験からそう思うのです。私が通っていた保育所の裏には山があり、ほぼ毎日その山へ遊びに行っていました。みんな裏山で遊ぶのが好きでした…」「私は重要であると考えます。私が住んでいた場所は自然に富み、小さな頃から自然と自然体験をする機会が多かったように思います…」などと自身の子どもの時代の経験に言及したものであった。

以上の4カテゴリが、比較的言及された割合の高いものであった。カテゴリとしては他に、「出会いや発見」「身体の発達」「好奇心」「人間関係」「思考力」「のびのび育つ」「季節感」があった。なお、ここでも、複数名からの言及がなされなかった内容については「その他」とした。

4. 考察

ここまで、幼稚園教諭免許状の取得をめざす学生の「自然観」と「自然体験の重要性」に関する認識について、学生自身によるまとめと自由記述の分析結果を報告してきた。学生一人ひとりの考えや思いは多様であったが、全体的な結果は、学生たちの認識の一般的な傾向や共通性を示すものであった。まず、「自然とはどのようなものですか？」という問いに対しては、「山川草木・動物など」や「天然」に言及した回答が多かった。自然について「人間社会や人間的諸事象と区別される特定の存在領域」（木田，2004，p.10）、「(nature)人為のくわわらないすがた。自然界」（村山，1980，p.284）などの辞書的な意味に言及しつつ、自然を客体としてとらえる記述をした学生が多かった。

また、「癒し」「好き」などの感情的な内容に言及した回答が多かった。最近、大学生の科学観・自然観を測定するための尺度構成を目的として質問紙調査を実施した川上・小城・坂田（2008）は、因子分析の結果から「癒す自然」「未来を築く科学」「脅威を与える科学」「保護を求める自然」「人智を超えた自然」「脅威を与える自然」の6つの因子

を抽出している。そして、これらを下位尺度として得点化し、性差を検討した結果から、「癒す自然」についてのみ女性の得点が高いことを見出している。幼稚園教諭をめざす学生もその多くは女性であり、自然の「癒し」の側面はとりわけ意識されているといえよう。

「幼児期の自然体験の重要性」に関しては、子どもと自然とのかかわりが「豊かな人間性の育成と科学性の芽生え」（井上, 2003, p. 46）のみならず、人間関係や身体の発達等、様々な学び・発達と関連しているとする回答が多かった。特に学生が着目していたのは「実体験・学び」「命や自然の大切さ」についてであり、学生の多くは、これらを「自分の経験」と結びつけて語った。

なお、保育者をめざす短期大学生を対象として質問紙調査を実施した加藤（2005）でも、「幼児期の自然遊びの必要性」について、自分の体験と照らし合わせた回答が多かった。ただし、加藤（2005）では、学生自身は自然に触れてこなかったが、子どもたちには自然体験をしてほしいとする回答もあったことが示されている。本研究ではこうした回答は示されなかったが、学生自身の子ども時代の自然体験と現在の自然観との関連については、今後より詳細に検討していく必要がある。

さらに、幼児教育コース学生の特徴として「豊かな心・感性」を重視する傾向が見出された。大野・吉村（2006）は、短期大学生を対象とした質問紙調査から、幼稚園教諭・保育士を目指す学生には「思考」よりも「感情」を指向する者が多いことを明らかにしている。自然観において「癒し」が重視されていたことと同様に、保育者を強く志望する学生は、「豊かな心・感性」などの感情にまつわる事柄に関心があるものと推察される。

こうした学生の認識の一般的な傾向や共通性は、熟達した保育者の認識との対比においてより明確となると考えられる。先述の通り、学生たちには、第5回（まとめ発表後）の授業において、熟達した保育者の面接結果の抜粋（越中・杉村, 2008）をプリントにて配布している。その内容は、学生たちに熟達した保育者と自分たちとの違いを感じさせるものであったようだ。

例えば、保育経験27年の女性教諭は、「自然とはどのようなものですか？」の問いに、「自然はね、そうですね、やっぱり自然はいつも私の生活の中にある。朝が来て、『あ、今日はいい天気だな』とか『今日も雨なんだな』とか、そういうことですごくなんか、自然の中でほんとに生かされてるって気がします」と答えた。この語りに着目した学生は、読後の感想の中で、熟達した保育者が「肌で感じられるものを特に取り上げて考えられていると感じました」としつつ、自分と熟達した保育者との違いについて「保育者の自然観はもっと自分と自然との距離を近づけて考えられている気がしました」と記した。他にも、「保育者の方々は自然を『ある』ものではなくて、自然の中に私たち人間が『存在している』としてとらえている人が多かった」「自分（人）も自然の一部に含まれるととらえた方が多かった」などの感想がよせられた。

また、自然体験の重要性について、保育経験23年の女性教諭は「自分の生きる道を〈中略〉見据えていく原点なる」と語り、保育経験16年の男性教諭は「やっぱり自然っていうのは法則」「（発達には）自ずからそうなるっていう道筋がある」と語った。こうしたことから、学生が「自然」を客体としてとらえているのに対して、熟達した保育者は、自然を「人間や人間的諸事象をもふくめたすべてのものの本来のあり方、おのずからあるがままのあり方」（木田, 2004, p. 11）ととらえているという違いがあると思われる。

以上、本稿では、幼稚園教諭免許状の取得をめざす学生の自然観について検討を行った。

結果として、自然についての認識における学生間の共通性が見出された。また、学生の中には、自分たちと熟達した保育者との自然観の相違を強く認識する者もいた。ただし、本稿では、学生の自然観と保育観との関連を検討するには至らなかった。また、学生が熟達した保育者の自然観・保育観から何を感じたかについても、十分に報告することができなかった。これらの点については、次稿で検討・報告を行う。

謝辞

本研究にご協力くださいました学生のみなさんに心より感謝申し上げます。また、本稿の作成にあたりご助言を賜りました広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設の杉村伸一郎先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 越中康治・杉村伸一郎 (2008). 保育者の自然観はいかにして形成されるか? (1) — 「森の幼稚園」の保育者が語る現在の自然観 — 幼年教育研究年報 (広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設), 30, 49-59.
- 井上美智子 (2003). 幼児期の自然とのかかわり いままでは (特別企画 幼児期と自然) 発達, 24 (96), 42-46.
- 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子 (1990). 保育観の形成過程に関する事例研究 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 141-162.
- 加藤聡子 (2005). 保育者をめぐる学生の自然体験と保育に対する意識調査 聖母女学院短期大学研究紀要, 34, 13-19.
- 川上正浩・小城英子・坂田浩之 (2008). 大学生の科学観・自然観について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 7, 57-65.
- 木田 元 (2004). 自然 木田 元 (編) 哲学キーワード辞典 新書館 pp. 10-13.
- 倉橋惣三 (1918/1965). 自然との一致 坂元彦太郎・及川ふみ・津守 真 (編) 倉橋惣三選集 第二巻 フレーベル館 pp. 22-23.
- 文部省 (1979). 幼稚園教育百年史 ひかりのくに
- 村山貞雄 (1980). 自然 村山貞雄 (監修) 幼児保育学辞典 明治図書 p. 284.
- 大野雄子・吉村真理子 (2006). 幼児教育志望者の性格タイプ傾向についての考察 (I) — @MBTI グループ体験を通して — 千葉敬愛短期大学紀要, 28, 163-174.